

# 市街地に設置する公園における植栽設計指針

平成18年3月30日 環境局長決裁  
改訂 平成31年3月26日 建設局長決裁

## 1 はじめに

### (1) 市街地に設置する公園における現状と課題

本市の公園は、昭和50年代以降急激に増設され、当時植栽された樹木が30年以上経過して大きく生長したことに加え、公園をとりまく社会状況の変化、市民要望の多様化などから、特に住宅地に設置された身近な公園において下記のような問題が多く発生し、近隣住民から苦情・要望が寄せられているところである。

- ・強風による倒木、花粉症や綿毛の飛散、病害虫の発生など
- ・隣接民地への枝葉の越境や日照障害、高圧線への接触など
- ・密植による生育阻害、防犯上の死角の発生など

これらの対策として過度な樹木伐採が行われることがあったことから、平成16年9月に「公園樹木の取り扱い方針」を策定し、基本的な考え方を整理している。

また、平成17年12月に札幌市緑の審議会から答申された「樹木を主とした市街地のみどりのあり方について」においても、市街地の樹木の社会的生育環境を述べたうえで、「樹木の適正な植栽計画と維持管理を行う必要がある」との提言がなされている。

### (2) 市街地に設置する公園における植栽の基本方針

本市の緑のあるべき将来像は、「札幌市緑の基本計画」に基本的な考え方が示されており、また、前述の緑の審議会答申においても、市街地の公園・緑地における樹木のあり方が述べられている。

これらを踏まえ、将来にわたって公園樹木が良好な生育環境を確保できるよう、下記の基本方針に基づき、植栽計画の検討を行うこととする。

- ① 地域の自然環境や社会環境と調和し、植栽の目的・機能に考慮した樹種の選定
- ② 敷地規模・立地条件を考慮し、将来の生長を見越した植栽位置の検討
- ③ 緑のボリュームアップを図りつつ、利用形態や樹種特性に応じた植栽間隔・密度の検討
- ④ 植栽地の土壌条件や植栽樹種の特性に応じた植栽基盤の改良
- ⑤ アンケートや意見交換会等による市民ニーズの把握と、計画に対する市民合意の形成

上記基本方針に基づく植栽計画検討にあたって、設計者向けマニュアルとして本指針を策定する。

なお、本指針は主として市街地に設置する街区・近隣公園を対象に策定しているが、これ以外の種別となる公園についても、本指針の趣旨を理解したうえで植栽計画を検討すること。

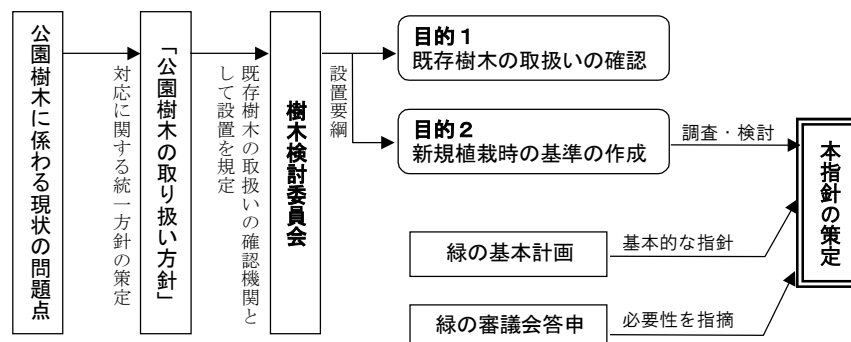
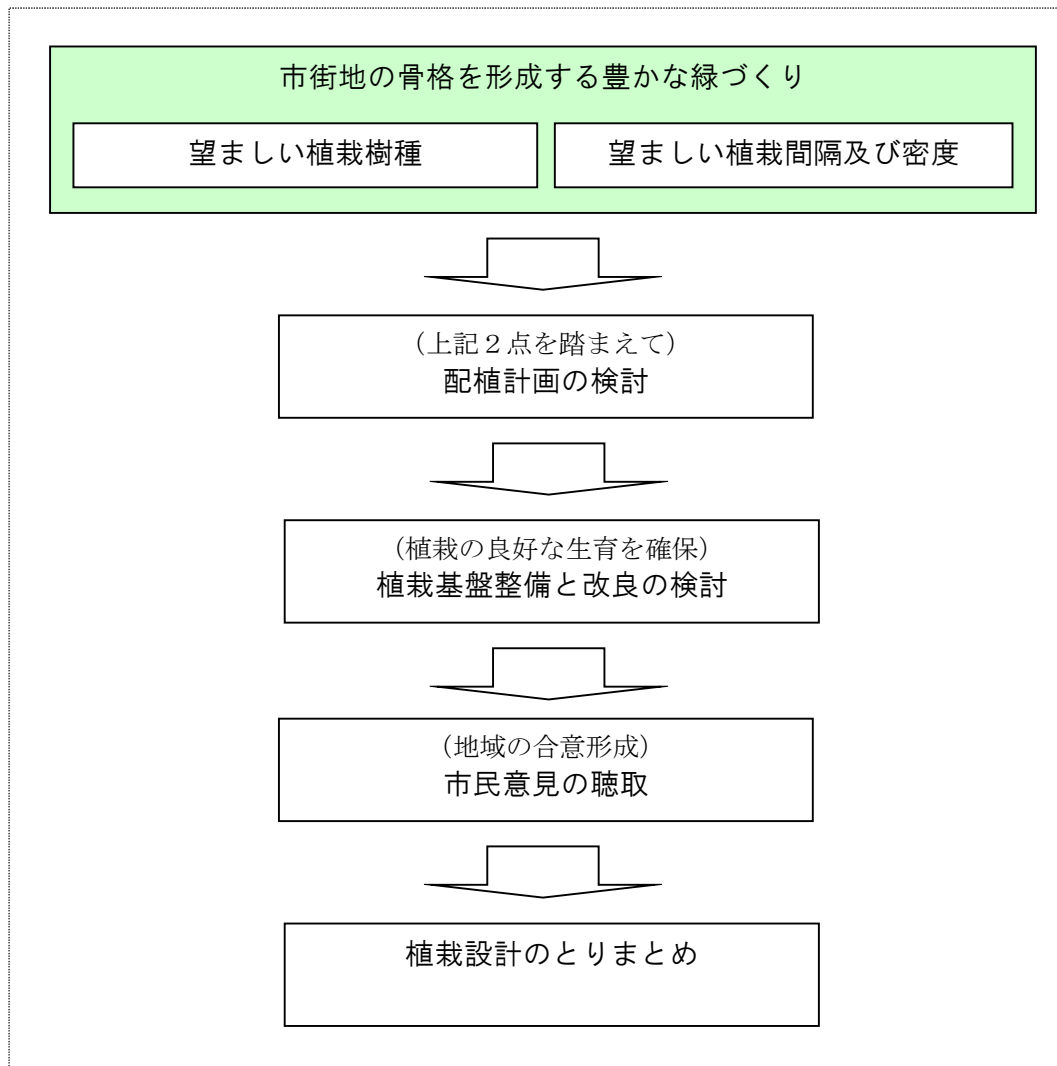


図 「公園樹木の取り扱い方針」と本指針策定の位置づけ

### (3) 植栽設計の流れ

本指針で示す植栽設計の流れは下図のとおりである。



## 2 植栽樹種

### (1) 樹種の区分

数十種にも及ぶ公共緑化用樹木の中には、本来、北海道に生育している樹種（在来種）もあれば本州以南や外国から導入された樹種（道外移入種・外来種）もあるし、数百年の寿命を持っている長命なものから、病虫害に侵されやすく、都市内の厳しい環境条件下ではいたって寿命が短いものもある。このように様々な特性を持っている樹木を一律に扱って公園内に植えてしまうことは、様々な問題の発生原因となってしまう。

樹木の様々な特性がまとめられた一覧表は昔から知られているが、その中から目的を絞り込んだ樹種を抽出することは、よほど樹木に通じたものでしかできないことである。このため、数ある樹種を樹木特性と、在来種であるか道外移入種・外来種であるかによって区分した表をもとに、植栽に使用する樹種を選択を進めることが必要である。（次頁の表参照）

公園で使用する緑化樹木(中高木性)の区分

樹種区分	基調樹種				添景樹種				早生樹種			
	在来種		道外移入種・外来種		在来種		道外移入種・外来種		在来種		道外移入種・外来種	
針葉樹	◎ アカエゾマツ	小	○ イチョウ	大	(中木)	△ アカマツ	中			× カラマツ	中	
	◎ キタゴヨウ ※	中	◎ コンコロールモミ	中	◎ イチイ ※	小	△ クロマツ	中		× ヨーロッパトウヒ	大	
	◎ トドマツ	中	○ チョウセンゴヨウ	大		◎ ゴヨウマツ ※	中					
			△ プンゲンストウヒ	小		△ ストローブマツ	大					
			◎ ヨーロッパアカマツ	中		◎ ニオイヒバ	小					
			○ ヨーロッパクロマツ	大		△ パンクスマツ	中					
						◎ メタセコイア	中					
樹種区分	基調樹種				添景樹種				早生樹種			
	在来種		道外移入種・外来種		在来種		道外移入種・外来種		在来種		道外移入種・外来種	
広葉樹	◎ イタヤカエデ	中	○ アカナラ	大	◎ アオダモ	中	◎ キササゲ ※	中	× ケヤマハンノキ	中	× ウンリウヤナギ	大
	◎ オオバボダイジュ	中	○ ケヤキ	大	◎ アズキナシ	中	◎ サトザクラ	小	× シラカンバ	中	× シダレヤナギ	大
	◎ カシワ ※	中	△ プラタナス	大	◎ イヌエンジュ	中	○ ソメイヨシノ	大	× ドロノキ	大	× シンジュ	大
	◎ カツラ	中	○ ユリノキ	大	△ エゾノコリンゴ	小	◎ ノムラモミジ ※	小	(中木)		× ニセアカシア	大
	◎ コナラ ※	中	◎ ノルウェーカエデ	中	◎ エゾヤマザクラ	中	△ ハクモクレン ※	小	○ アキグミ	小	× ネグンドカエデ	中
	◎ シナノキ	中	◎ サトウカエデ	中	◎ キタコブシ	中	△ ヒメリンゴ	小			ポプラ類	大
	○ トチノキ	大			◎ ナナカマド	中	◎ ベニバナトチノキ	中			× クロボプラ	
	○ ハルニレ	大			◎ ハウチワカエデ	中	◎ ヤマボウシ	小			× 改良ポプラ	
	◎ プナ ※	中			◎ ハクウンボク	中	(中木)				× ギンドロ	
	△ ホオノキ ※	大			◎ ハシドイ	中	△ ウメ	小				
	◎ ミズナラ ※	中			◎ ヤマモミジ	中	△ エゴノキ ※	小				
	○ ヤチダモ	大			(中木)		△ ナツツバキ ※	小				
					◎ ツリバナ	小	◎ ライラック	小				
					◎ マユミ	小						
					◎ ヤマグワ	小						

凡例	※ 庭園樹種として利用が主であることや、流通が少なく、公園での使用がほとんどないもの
	◎ 民地との離れを確保すれば、問題の起きにくい樹木
	○ 樹冠が大きくなるので、使用にあたっては、十分なスペースを確保する必要がある樹木
	△ 身近な公園での使用はなるべく避けたい樹木(注: 使用禁止ではなく、郊外の公園での使用のあつたり、十分な生育条件を確保して維持管理手間を省略できる、などの配慮が必要である樹木)
	× 新規植栽しない樹種(地域の要望がある等の特別な場合を除く)
	・大・中・小の表示は、樹冠の大きさ(p.6)を示す
	・各樹種区分は次のとおり。
	基調樹種: 長く生き続けて地域の骨格を形成する樹種
	添景樹種: 花や実や紅葉など、観賞価値に優れた樹種
	早生樹種: 厳しい環境下でも生育でき、成長の早い樹種(早期緑化樹)
	在来種: 本来北海道に生育している樹種
	道外移入種・外来種: 北海道外から持ち込まれた樹種・外国から持ち込まれた樹種

(2) 植栽に注意を要する樹種

これからの公園樹に求められる要件としては、美しさや丈夫さはもちろんのことであるが、維持管理の容易なもの、近隣への問題の発生の少ないもの、倒木や落枝など、利用者や近隣への危害が加わらないものなどの点が重要になるものと考えられる。

現在使用されている緑化樹には、倒木や傾斜木、落枝や幹折れ、鋭い棘などといった、利用者や近隣住民に危害を与えかねない、要注意要素を持っているものがある。(下表及び次頁表参照)

また、いつまでも落ち葉がだらだらと落ち続けたり、花粉や綿毛の飛散、実の落下、樹液の落下、病虫害の多発、害虫からの排泄物の落下など、周囲に迷惑を及ぼすマイナス要因を持っているものもある。

危険な要因はできるだけ回避すべきであるが、マイナス要因を持つ樹種の中には、サクラ類やナナカマドのように地元から要望の高いものも含まれ、マイナス要因の説明もしっかり行っておく必要があるものと考えられる。

緑化樹木(中高木性)の持つマイナス要因

樹種区分	樹木特性区分	由来区分	要因区分 マイナス要因項目	要注意要素										備考	
				す 浅 根 性 で 倒 木 し や	傾 斜 木 化 し や す い	根 張 り が 弱 く 、 強 風 等 で 折 れ や す い	枝 や 幹 に 粘 り が 少 な く す い	枝 や 幹 が 腐 朽 し や す い	鋭 い 棘 や 、 葉 先 が 尖 つ て 危 険 な い	山 大 き な 落 ち 葉 が 沢 山 に あ ら わ る	い 落 葉 期 間 が や や 長 い	花 粉 の 飛 散 が ひ ど い	種 子 や 綿 毛 の 飛 散		い 病 虫 害 の 発 生 が 多 い
針葉樹	基調樹種	在来種	◎ アカエゾマツ												
			◎ キタゴヨウ ※												
			◎ トドマツ												スズ病になりやすい
		外来種等	○ イチョウ												葉に油分が多く、腐りにくい
			◎ コンコロールモミ												
			○ チョウセンゴヨウ												
			◎ プンゲンストウヒ												生長がやや遅く、樹形がコンパクトな利点がある
	添景樹種	在来種	◎ イチイ ※★												
			△ アカマツ												雪が枝に乗りやすく、枝折れがしやすい
		△ クロマツ													雪が枝に乗りやすく、枝折れがしやすい
		外来種等	◎ ゴヨウマツ ※												
			△ ストローブマツ												枝がもろく折れやすい。葉の更新による落ち葉がひどい
			◎ ニオイヒバ												
			△ パンクスマツ												根張りが浅いために傾斜木になりやすい
		早生樹種	外来種等	△ カラマツ											老木になると枝が折れやすい。生長が早く特に注意が必要
△ ヨーロッパトウヒ														枝が折れやすく倒れやすい。生長が早く特に注意が必要	

凡例 ※ 庭園樹としての利用が主であることや、流通が少なく、公園での使用がほとんどないもの  
◎ 民地との離れを確保すれば、問題の起きにくい樹木  
○ 樹冠が大きくなるので、使用にあたっては、十分なスペースを確保する必要がある樹木  
△ 身近な公園での使用はなるべく避けたい樹木(注:使用禁止ではなく、郊外の公園での使用であったり、十分な生育条件を確保して維持管理手間を省略できる、などの配慮が必要である樹木)  
★ 中木扱い

緑化樹木(中高木性)の持つマイナス要因

樹種区分	樹木特性区分	由来区分	要因区分	要注意要素					迷惑要素				備考		
			マイナス要因項目	す 浅 根 性 で 倒 木 し や	傾 斜 木 化 し や す い	強 風 等 で 折 れ や す い	枝 や 幹 に 粘 り が 少 な く	す い 枝 や 幹 が 腐 朽 し や	鋭 い 棘 や 、 葉 先 が	山 大 き な 落 ち 葉 が 沢 ら	い 落 葉 期 間 が や や 長	い 花 粉 の 飛 散 が ひ ど		種 子 や 綿 毛 の 飛 散	い 病 虫 害 の 発 生 が 多
広葉樹	基調樹種	在来種	◎ イタヤカエデ												
			◎ オオバボダイジュ												
			◎ カシワ ※												冬も葉がついているので、葉ズレがうるさい
			◎ カツラ												
			◎ コナラ ※												
			◎ シナノキ												
			○ トチノキ												大きな落ち葉が落ちてくる
			○ ハルニレ												
			◎ ブナ ※												
			△ ホオノキ ※												流通が少ない。特に葉が大きく街中では迷惑がられやすい
			◎ ミズナラ ※												
			○ ヤチダモ												
	外来種等	○ アカナラ												落葉が遅く、期間が長い	
		○ ケヤキ													
		△ プラタナス												特に葉が大きく街中では迷惑がられやすい	
		○ ユリノキ													
		◎ ノルウェーカエデ													
		◎ サトウカエデ													
		◎ アオダモ												スズ病になりやすい	
		◎ アズキナシ												キジラミの排泄物がひどい年がある	
	添景樹種	在来種	◎ イヌエンジュ											病害虫の発生が多く、維持管理手間が負担となる	
			△ エゾノコリンゴ											病害虫の発生が多い	
			◎ エゾヤマザクラ												
			◎ キタコブシ												
			◎ ツリバナ ★												
			◎ ナナカマド												材が腐朽しやすく、危険木化が最も早い樹種である
		外来種等	◎ ハウチワカエデ												
			◎ ハクウンボク												
			◎ ハシドイ												
			◎ マユミ ★												
			◎ ヤマグワ ★												
			◎ ヤマモミジ												
早生樹種	在来種	△ ウメ ★											環境がよく、十分な植栽基盤を確保しないと良好な生育が望めない		
		△ エゴノキ ※★													
		◎ キササゲ ※													
		◎ サトザクラ													
	外来種等	○ ソメイヨシノ													
		△ ナツツバキ ※★												環境がよく、十分な植栽基盤を確保しないと良好な生育が望めない	
		△ ハクモクレン ※													
		◎ ノムラモミジ ※													
		△ ヒメリンゴ												病害虫の発生が多く、維持管理手間が負担となる	
		◎ ベニバナトチノキ													
		◎ ヤマボウシ													
		◎ ライラック ★													
		○ アキグミ ★												生長が早い他の樹木を被圧するほど大きくならない	
		△ ケヤマハンノキ													
△ シラカンバ															
△ ドロノキ															
△ ウンリウウヤナギ															
△ シダレヤナギ															
△ シンジュ															
△ ニセアカシア															
△ ネグンドカエデ															
△ ボブラ類															
△ クロボブラ															
△ 改良ボブラ															
△ ギンドロ															

凡例 ※ 庭園樹としての利用が主であることや、流通が少なく、公園での使用がほとんどないもの  
 ◎ 民地との離れを確保すれば、問題の起きにくい樹木  
 ○ 樹冠が大きくなるので、使用にあたっては、十分なスペースを確保する必要のある樹木  
 △ 身近な公園での使用はなるべく避けたい樹木（注：使用禁止ではなく、郊外の公園での使用であったり、十分な生育条件を確保して維持管理手間を省略できる、などの配慮が必要である樹木）  
 ★ 中木扱い

### 3 植栽間隔及び密度

植栽計画を検討する際は、ある程度の生育を見越して間隔及び密度を決定すること。  
植栽設計図を検討する際、設計図に表示するときさままかな目安となる将来的な樹冠の大きさについて下表に示す。

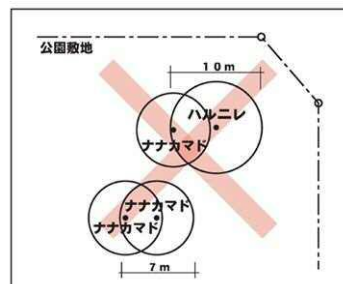
表 主な植栽樹木に関する将来的な樹冠の目安（括弧で示す数字は設計図面に表示する場合の直径）

樹冠の区分	将来的な樹冠直径の目安	主な樹種		
		広葉樹		針葉樹
大樹冠	10～12m (10m)	アカナラ ウンリュウヤナギ オニグルミ ギンドロ ケヤキ シダレヤナギ シンジュ ソメイヨシノ トチノキ	ドロノキ ニセアカシア ハルニレ ブラタナス ホオノキ ポプラ類 ヤチダモ ユリノキ	ストローブマツ チョウセンゴヨウ ヨーロッパクロマツ ヨーロッパトウヒ  イチョウ
中樹冠	7～8m (7m)	アオダモ アズキナシ イタヤカエデ イヌエンジュ エゾヤマザクラ オオバボダイジュ カシワ カツラ キタコブシ ケヤマハンノキ コナラ サトウカエデ	シナノキ シラカンバ ナナカマド ネグンドカエデ ノルウエーカエデ ハウチワカエデ ハクウンボク ハシドイ ブナ ベニバナトチノキ ミズナラ ヤマモミジ	アカマツ カラマツ キタゴヨウ クロマツ ゴヨウマツ コンコールモミ トドマツ バンクスマツ メタセコイア ヨーロッパアカマツ
小樹冠	4～5m (4m)	ウメ エゴノキ エゾノコリンゴ サトザクラ ナツツバキ	ノムラモミジ ハクモクレン ヒメリンゴ ヤマグワ ヤマボウシ	アカエゾマツ イチイ ブナゲンストウヒ
	3～4m (3m)	アキグミ カンボク（テマリ カンボク）	ツリバナ マユミ ライラック	ニオイヒバ

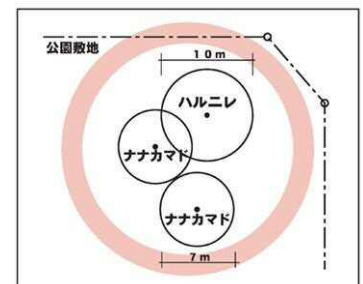
上表で示す樹冠の目安は、道立工業試験場・道立林業試験場・(株)イメージング・アイが構築した樹木画像データベース及び樹木生長予測システムを活用し、植栽後 20～30 年に想定される幹周形状に沿う樹木の形状データと、そのほか経験的な判断を加えて整理した。

○樹高が競合する場合、樹木の良好な生育、開放感を維持するために、将来的に大きく樹冠が重複するような配植は避けること。(樹冠の重なりは、それぞれの樹冠半径を超えない程度の配植を最大とする。また、重なる樹木が多い場合は重なる程度を半径の2分の1程度とするなど、混みすぎないように注意すること)

ただし針葉樹及び中低木にあつては、さらに見通しの確保についても十分注意すること。



望ましくない配植間隔例



望ましい配植間隔例

- 6 頁表に示されていない樹種についても、類似種の樹冠径を代用して考えること。
- 目標とする樹林率 [= 計画における樹冠面積 (敷地内) の合計 / 計画対象地面積] を、下記のように設定する。
  - ・ 1000m<sup>2</sup>以上の街区公園にあつては、原則20%以上の樹林率を確保する。
  - ・ 近隣・地区公園にあつては、原則30%以上の樹林率を確保する。
  - ・ 1000m<sup>2</sup>未満の街区公園にあつては、設定しない。



○ 樹林地を形成する場合

基本的には、前述の樹木の将来的な樹冠に関する目安をもとに配植するが、公園のデザインによっては樹林地を形成する場合が考えられる。その際は、期待する活動タイプを設定し、下表の立木密度の目安を参照に、大～小樹冠を組み合わせることで配植すること。

市街地における身近な公園において期待される活動のタイプは、主に「休憩型」あるいは「運動型」である。

表 レクリエーション活動に対応した樹林密度の目安

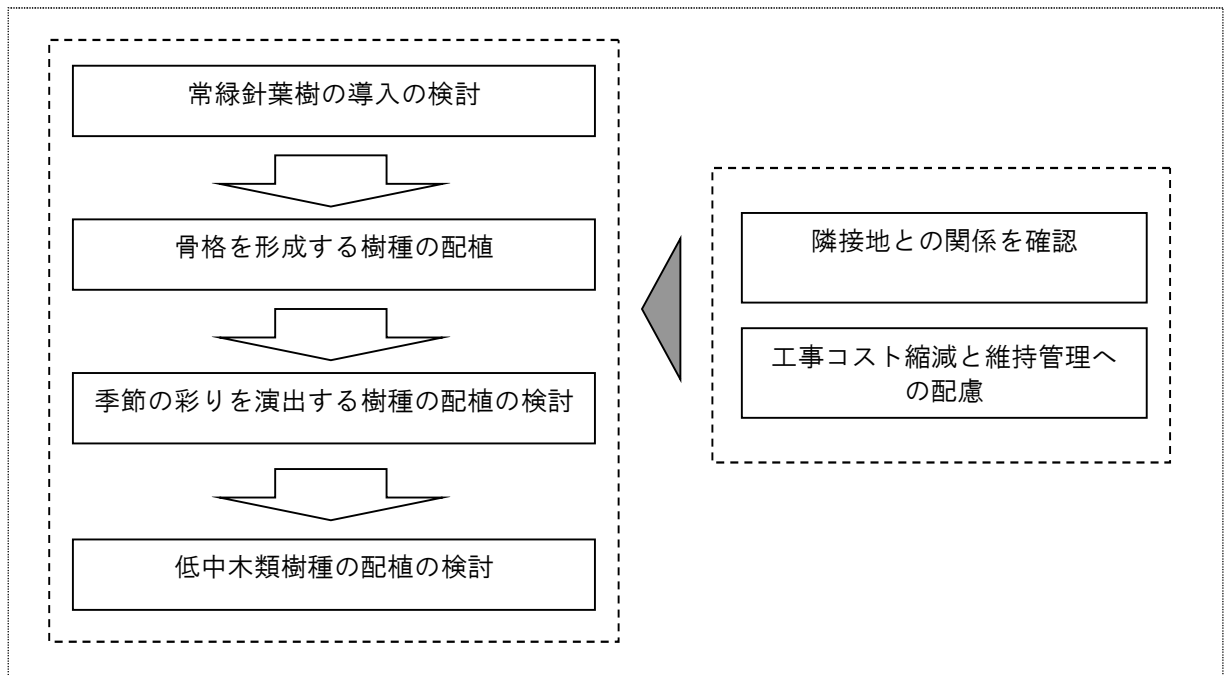
活動のタイプ	立木密度	立木の間隔
散策型活動	600 本/ha 以上	約 4m間隔
休憩型活動	300～600 本/ha	4～6m間隔
運動型活動	300 本/ha 以下	6m以上間隔

(「森林レクリエーション利用とそのイメージに関する基礎的研究」造園雑誌 42(2)より)



## 4 配植計画

市街地に設置する身近な公園における植栽の配植は、下図の流れを参考に検討する。また、大規模公園等にあつては、本指針の記載事項に留意し、別途植栽計画を検討すること。



### (1) 常緑針葉樹

積雪寒冷地である本市においては、常緑広葉樹の使用が困難なために、11月から4月までの半年間は緑の量が極端に少ない状況にある。冬季の緑量確保と地域特性に応じた個性豊かな空間の創出のために、下記に留意して、常緑針葉樹の植栽を検討すること。

- 近隣住宅への日照の影響
- 日陰による路面凍結や雪解けの遅延
- 枝からの落雪の影響
- 枝葉による視界の閉塞（防犯面）
- 良好な樹形を保つスペースの確保（下枝の範囲と利用動線が交雑しないように）
- 寒風害に対する抵抗性
- 電線等の架空設備への影響

### 事例)



常緑針葉樹は、冬期間においても緑量が確保でき、北国らしい景観を形成する



しかし、上に伸びる性質の強い針葉樹の植栽には、近隣への日照確保や電線等に対する配慮が必要である



## (2) 骨格を形成する樹種

先に示した「公園で使用する緑化樹木の区分」(p. 3)における『基調樹種』は、札幌地域の環境にもっとも適した樹種であり、50～100年以上長く生き続けて地域の骨格を形成する種類である。

地域の骨格となるような緑を形成し、長期的な展望のもと次世代の子孫にも残せる質の高い緑の財産をつくっていくため、公園の基本となる樹木は、『基調樹種』から選択する。

### ○立地による基調樹種を選択

- ・やや湿り気のある土地を好む、乾燥は避ける：トチノキ、カツラ、ユリノキ
- ・適潤～やや湿り気のある土地を好む：ハルニレ、ヤチダモ、ケヤキ
- ・低湿地、過乾燥地でなければ可：シナノキ、オオバボダイジュ、ナラ類、カエデ類

### 事例)



身近な公園に植栽されたハルニレが  
地域景観の骨格を形成している

## (3) 季節の彩りを演出する樹種

北国は四季の変化が非常にはっきりしており、植栽の計画にあたっては、樹木における春の生命の躍動、夏の瑞々しい緑、秋の色彩の乱舞をうまく生かしていくことが大切である。

花や実や紅葉など、観賞価値に優れた樹種は、先に示した「公園で使用する緑化樹木の区分」(p. 3)の中で『添景樹種』として区分しているが、病虫害や気象害などに弱く、寿命が短いため永続性という点ではやや欠ける。そのため、あくまでも骨格となる緑の添景的な要素として考える。

### 事例)



長期的に緑を形成する基調樹種により景観の骨格を形成し、  
彩りの豊かな樹種はそれらに添える程度で配植を行っていく  
(上図はフォトモンタージュによるイメージ図)

#### (4) 中低木類やグラウンドカバープランツ

市街地の身近な公園では、ツツジやアジサイ、ハギなどの花によって季節感を感じることができ、庭のない集合住宅などに住む人にとっては、かけがえのない自然とのふれあいの場となっている。

しかし、中低木類の中には本州以南からもたらされたものや園芸品種なども多く、北海道の厳しい環境下では、それらの特性を発揮させるためには剪定や整枝、施肥、冬囲いなど十分な維持管理が必要なものが多い。また近年では、ブッシュを形成して見通しを悪くする低木類の植栽に、風紀上の面から拒否感を持たれることも多くなってきている。

このため植栽に当たっては、次のような視点の元、十分な検討を行うこと。

- ・庭などにこれらの低木類を植えていることの多い住宅地内の公園などでは、地域的な視点から、あえて低木類を植栽しないことも検討する。
- ・公園の外から死角ができないよう、配植する場所には注意をすること。
- ・冬囲いの不要な耐雪性の低木(モンタナハイマツ、キンロバイ、ハマナス類)などは、剪定整枝は必要であるが、コスト面では多少有利である。
- ・冬囲いが不要で、維持管理がほとんど不要なミヤギノハギやシラハギは、特に傾斜地での法面修景に大変効果的である。
- ・グラウンドカバープランツを使用する場合、矮性で地を這うような種類は雑草に負けやすく、維持するには手間がかかるのでなるべく使用は控え、ヘメロカリス類やギボウシ類などのように株状になり、ある程度草丈があるため雑草に負けにくい種類を使うようにすること。
- ・グラウンドカバープランツを植栽する場合には、雑草の混入のない用土を使うほか、当初からリサイクルチップなどでマルチングを施すようにする。

#### (5) 早生樹種の取扱い

先に示した「公園で使用する緑化樹木の区分」(p.3)における『早生樹種』は、厳しい環境下でも生育でき、生長の早い樹種(早期緑化樹)である。その強い性質のために、近年は住民から迷惑がられることもしばしば発生するため、今後の公園では新規植栽しないことを基本とすること。

ただし、環境条件が厳しい、早期緑化が求められるといった場合には、緑の防護壁など第一段階の緑として適宜用いることも考えられる。その際は、次の段階となる長期的な緑もあわせて考えること。

#### (6) 隣接地との関係

隣接地との関係について、以下の点に配慮すること。

##### ①枝葉の越境に対する配慮

樹冠が民地に越境した枝葉は、原則的に切り落とさなければならない。その結果、維持管理コストがかかるうえに樹冠形状も偏ることとなる。そのような事態を避けるために、敷地境界に近い部分への植栽を考える場合には、将来的に生長する樹冠の大きさを見越して配植すること。

植栽位置と民地境界との関係及び樹種については、先に目安として示した将来的な樹冠の大きさの1/2を最低値として敷地境界から離して配植すること。

##### ②日照確保に関する配慮

公園の北側に住宅地等が隣接している場合は、日照を妨げるような配植は避けること。

### ③安全性に関する配慮

(倒木による被災の回避)

札幌市では、強風の場合には南側から吹くケースが多い。そのため、民地への倒木による被災を避けるため、公園の北側においては根がしっかりした樹木を用いることとし、ニセアカシアやシダレヤナギ、ネグンドカエデなど倒伏の恐れの高い樹木は避けること。

(犯罪要素の回避)

住宅等が隣接している場合は、木の枝を登って侵入する・覗かれるなどの行為が行われないよう配慮が必要である。また、周囲の道路、住居等から園内の見通しが確保されるよう配慮すること。

### ④道路からの離れ

道路空間には、車輛及び歩行者の通行の安全性・快適性を保つために、歩道の場合、高さ 2.5m、車道の場合、高さ 4.5mの範囲で建築限界が設定されている。公園敷地に道路用地が隣接する場合、これらに配慮する必要がある。

針葉樹は、多くの場合、樹形が円錐形で下枝が横方向に伸長する傾向にあるため、これらの建築限界を確保する場合は十分な離れをとる必要がある。枝張・葉張位置の低い中低木に関しても同様である。

多くの広葉樹高木類の場合は、誘導剪定を行うことで樹形を崩さず下枝を上げることが可能であるので、道路境界との離れは道路構造物が根に悪影響を与えない程度のものとする。

先に示した『基調樹種』の中で、もっとも太くなると予測される樹種のひとつはトチノキで、直径 4cm (C=12cm) を植栽した場合、30 年後の予測幹径は約 45cm である。これをもとに移植根鉢の形状を計算すると直径約 2.8m であり、これに植え穴余裕を加えた半径分 (約 2.0m) を道路境界からの離れとして設定する

表 道路境界から確保すべき配植離れの設定

樹種	道路境界からの離れ
広葉樹高木類	最低 2.0m 離すこと
針葉樹、中低木類	将来的な樹冠の大きさの 1/2 を最低値として境界から離すこと

※生垣については、管理予定者と管理計画について十分協議のうえ別途協議すること

#### 事例)



周辺からの見通しが遮られ、園内が閉塞的な雰囲気となっている (右側が公園)



苦情等により強剪定を余儀なくされると、維持管理コストがかかるうえ、樹形も乱れてしまう

## (6) 工事コスト縮減と維持管理への配慮

### ①工事コスト縮減

「国土交通省公共工事コスト縮減対策に関する新行動計画」に基づき、本市公園緑地工事においても工事コスト縮減に取り組んでいる。植栽工については下記の項目について考慮・検討して植栽設計を行うこととする。ただし、あくまで適正設計を前提とし、存在効果や機能の低下につながる工事コスト縮減は行わないよう注意すること。

- ア 既存樹木の積極的活用
- イ 目的に応じた適正（樹形・性質等）な樹木及び植栽適地樹種の選定
- ウ 植栽密度の低密度化を検討する（将来の成長を見越した密度の植栽）
- エ 樹木サイズの低規格化を検討する
- オ 苗木・ポット樹木の利用を検討する

### ②維持管理への配慮

コスト縮減対策として、単に工事コストだけでなく、維持管理費を含めたライフサイクルコストの縮減に取り組む必要がある。維持管理費の縮減については、①—イ、ウに加えて下記の項目について検討すること。また、これらの費用が相当程度必要となる樹木の植栽に当たっては、その必要性について整理するとともに、維持管理費用の軽減策についても検討すること。

- ア 冬囲いや刈り込み及び剪定の費用に関する検討
- イ 施肥や除草などの費用に関する検討
- ウ 病虫害に関する対策費用についての検討

(p. 4、5 表、p. 10 参照のこと)

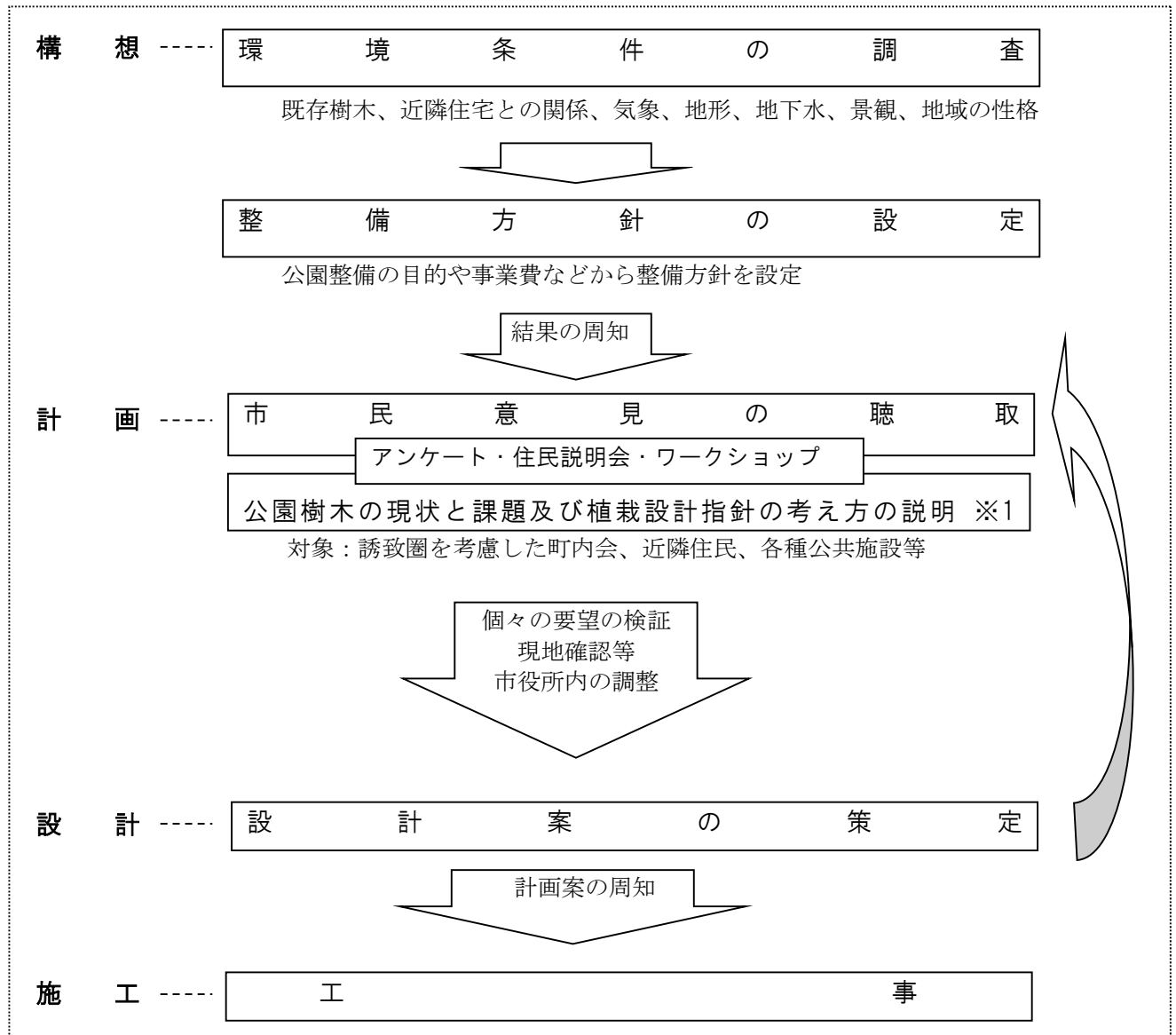
## 5 植栽基盤整備と改良

植栽地の土壌条件は、樹木の生育にとって最も重要な要素の一つであり、その良否がその後の樹木の生長に大きく影響するため、事前に土壌の性質を調査・分析し、植栽計画に応じた植栽基盤（有効土層）の確保と土壌改良を行う必要がある。

植栽基盤造成の手順については、公園緑地工事設計要領第2章[1]—2. 植栽基盤工によること。

## 6 市民意見の聴取

公園緑地に対する市民ニーズの多様化に加え、そのあり方や整備内容についても市民の関心は高い。整備に当たっては、公共施設としての公平性を基本としながら、計画段階から住民説明会・ワークショップを通じて市民意見の反映を図る。本指針と相反する要望があるときには、十分な意見交換と検討を行ったうえで計画を策定すること。



※1・樹木の大切さの啓発

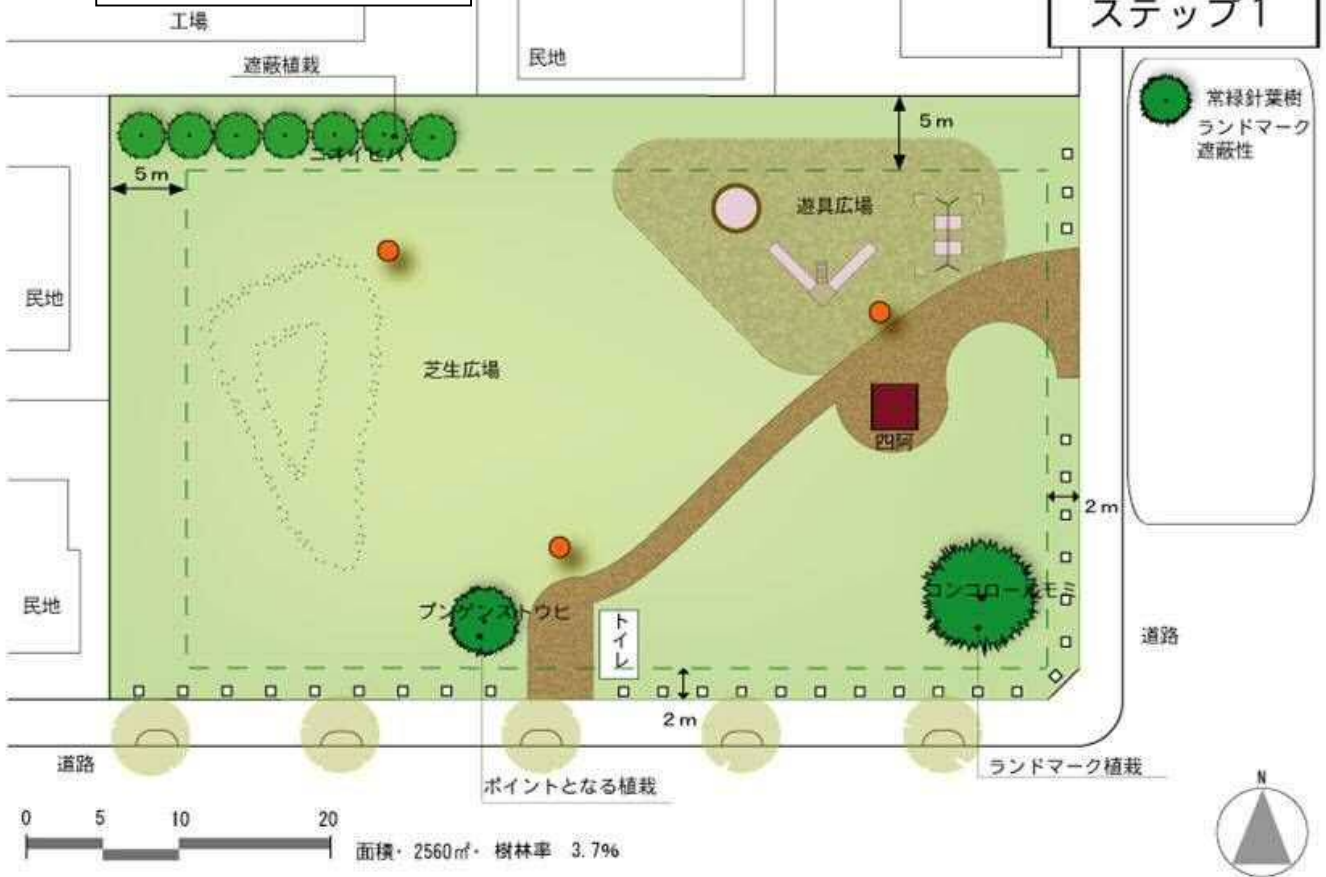
・中低木の導入と地域の関わり方の調整

・植栽当初と将来の緑のボリュームについての説明など

※参考「個性あふれる公園整備事業（リフレッシュ工事）実施設計マニュアル」

# 配植計画モデル図

## ステップ1



## ステップ2

